

## 育児の〈現場〉から

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 武内 佳代  
お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 小畑 文

本WGの主要メンバーであり、2007年秋までF-GENSのプロジェクトDのリサーチ・アシスタント(以下、RA)をしていた小畑文さんは、2007年12月、無事に男児をご出産された。ちょうどこの初めての妊娠の最中、本WGでともに活動を続けた小畑さんは、他方で、大学院のゼミに参加し、RAとしては2007年8月のプロジェクトD企画の国際シンポジウム「文化表象の政治学—日韓女性史の再解釈—」などの運営に携わり、10月のJSGS-Net企画の若手セッション「近代・女性・装置—イマジネーションの彼方へ—」ではコメンテーターをなさった。ここでは、妊娠と研究活動との両立を経て、今まさに育児の〈現場〉へと踏み込まれた小畑さんに、経験のない若手研究者(武内)の立場から率直な質問をぶつけている。妊娠・出産・育児をめぐる対話の機会すら少ない経験者と未経験者の若手研究者間の相互理解の手助けとなれば幸いである。



武内

今回、小畑さんは初めて妊娠しながら研究活動をするという体験をしたわけですが、その間、いったいどういう思いがともなっていたのでしょうか？何か大変なことはありましたか？



小畑

まず若手セッションのコメンテーターは、妊婦の私に一任していただき、ありがたかったと感じています。ですが、もちろん初産だったので、なにが起こるかわからないという不安はいつもつきまどっていました。また何よりも、もしものとき皆さんに迷惑がかかってしまうかもしれないという不安がありました。

大抵妊娠していると、本人だけではなく周囲も気を遣ってあまり仕事を任せることがなくなり、とくに月齢が経つにつれて(私の場合は8か月でした)、この傾向は強くなります。ところが出産した今になって分かるのですが、じつは子どもがお腹の中にいるうちに研究活動をやっておいの方がいい側面もあるんです。とくに妊娠後期は、妊娠前期の悪阻の時期とは違い、身体が安定してくるので、無理しない程度に研究をこなしていくことが、出産後の自分の研究活動を考えると大事なことだと思います。メンタル面でも鬱にならずに済むと思います。そういった意味で、セッションのお話はありがたかったと感じています。

研究活動に関しては、私の専攻がアメリカ演劇なので、英文を読まざるを得ないのですが、悪阻の時期はかなり横文字を読むのがきつかったのを記憶しています。また、何より大変だったのは、月齢の経過とともに身体の動きが思うようにならなくなっていったことです。身体が重くなり、行動がいちいちスローになるので、イライラすることも多かったです。またセッション当日は、胎動をかなり感じるころでしたので、実のところ、自分のコメントの時に限ってお腹の動きが活発になったときにはどうしようかと思いました。



武内

妊娠なさってすぐWGが立ち上がり、一緒に活動することになったわけですが、若手研究者主導のWGの活動は、当時妊婦だった小畑さんにとってどのようなものだったのでしょうか？



小畑

今後の自分に関わる最重要課題でした。といっても実は当初はあまり自覚がありませんでした。活動を通していろいろな方のお話を伺い、また出産や育児に関心を持って積極的に活動している同じ若手研究者の姿を見て、刺激を受け、次第により自覚をもって活動に参加したいと思うようになりました。今では、今後の大学の研究環境を向上させるためにも、ライフワークとして持続的に関わっていきたいと考えています。



武内

出産なさってみて、現在、楽しいこと、あるいは不安なことなどはありますか？



小畑

あまり、悲観的なことは言いたくないのですが、不安ばかりです。「育児」にはゴールがありませんし、「正解」もありません。そのくせ、世間には育児に関するさまざまな情報が溢れています。「胎教」だとか「母乳育児」だとかがその例です。私は、大学院で散々、あらゆるものに「正解」など存在しないことを、人文学をとおして勉強してきたのですが、それでも、現在いろいろな情報に惑わされてしまっています。こんな私でも育児ができるのか、本当に不安です。でも「親が無くても子は育つ」わけですから、あまり思いつめないようにしようとも思っています。

最初の1ヶ月くらいは、出産時の切開部の痛み、後陣痛、昼夜間わずの2~3時間おきの授乳、乳腺炎など、妊娠時には思いもよらなかった苦しみが次々と襲ってきました。ですが2ヶ月が経ち、それらが過ぎた今になって、少しは余裕が持てるようになり、たまに見せる赤ちゃんの笑顔に喜んだり、「アー」だとか「ウー」だとかいった喃語に応じて話しかけたりするようになりました。保健師さんに伺ったところ、3ヶ月を過ぎると育児が楽になり楽しめるようになるそうです。そうなる日を楽しみに今の苦しみを乗り越えるぞ！と思っています。



武内

これから妊娠・出産があるかもしれない若手研究者に一言をお願いします。



小畑

あまり妊娠、出産という事柄に対して過度にストレスを感じて欲しくないと思っています。とくに「産まない」者と「産んだ」者との線引きは無くなって欲しいと願っています。この線引きはきっと互いの無理解からきているものだと思います。だからこそ、育児に対しさまざまなスタンスを持った若手研究者が参加するこのWGの活動は、大変意義のあるものだと思います。

それから、育児において若手研究者のネットワークを維持することは、とても大事なことです。というのも実際、研究者には、なかなか「ママ友」が出来づらいですからね。ネットワークがあれば、たとえ育児をしていても、研究に対するやる気も持続しますし。

以上簡単ではありますが、私もまだ育児に関しては初心者なので、これからも勉強していきたいと考えています。

小畑さんには、出産なさってから日の浅いうちに、いろいろと質問にお答えいただきまして、心より感謝申し上げます。耳目に新しい「育児不安」は、核家族にある現代の母親の育児に関する知識不足と、それによる不安が要因の一つとされている。そうした知識不足の問題は、育児以前の「妊娠・出産不安」といったものもまた生み出しているのではないだろうか。とりわけ、それはそういった知識を得る機会の少ない若手研究者においてはなおさらだろう。どんなに経験者から「出産や育児は素晴らしい！」と言われようとも、研究活動との両立においては恐れをなしてしまうことの多い若手研究者にとって、小畑さんの体験談は、多くの知恵をもたらしてくれると確信している。